

3. 熊本県下における椎茸生産の現状 (I)

— 椎茸生産の概況および2、3の特徴 —

九州大学 青木 尊重
坂本 格
○吉 良 今朝 芳

I 概況

熊本県における椎茸生産は全国の約 1/10 を生産し、

わが国では、大分、宮崎、静岡に次ぐ主産地であり、昭和36年には540.7 ton (推計) の生産高を示している。

第1表 種菌及び椀木伏込による年次別地区別椎茸の推計生産高

地区別	34年	35年	36年生産高(kg) () 内は乾椎茸に換算			
	生産高(kg)	生産高(kg)	乾椎茸(kg)	生椎茸(kg)	計(kg)	比
熊 飽	4,400	5,256	3,300	33,500 (6,700)	10,000	1.8
玉 名	3,600	5,386	640	29,600 (5,920)	6,560	1.3
鹿 本	9,600	2,530	12,680	31,500 (6,300)	18,980	3.5
菊 池	24,000	40,770	49,020	33,500 (6,700)	55,720	10.3
阿 上	96,000	143,544	183,300	75,000 (15,000)	198,300	36.6
益 蘇	32,000	56,222	57,910	30,700 (6,140)	64,050	11.8
城 城	6,800	5,669	1,000	21,000 (4,200)	5,200	0.9
代 代	4,300	5,780	2,000	23,000 (4,600)	6,600	1.3
北 北	5,200	5,146	520	22,800 (4,560)	5,080	0.9
球 磨	82,600	92,128	148,050	76,500 (15,300)	163,350	30.2
天 草	3,300	4,466	2,200	23,200 (4,640)	6,860	1.3
計	271,800	376,897	460,640	400,300 (80,060)	540,700	100

県内特殊林産物の年度別生産額中椎茸の生産額は年々増加の一途を辿り、36年は5億3千万円(65.5%)

を占め、椎茸価格の下落した37年でさえも4億2千万円(約50%)を示しているのである。

第2表 熊本県特殊林産物年度別生産額

種別	25	26	27	28	29	30	31
	千円						
シイタケ	78,039	137,000	168,934	177,937	129,918	300,825	269,568
クマタケ	31,890	35,260	38,980	45,000	12,000	20,805	10,160
竹タケ	28,343	32,102	53,852	56,000	56,000	70,000	81,500
タケノコ	22,500	22,500	30,937	33,750	33,750	36,000	41,175
その他	92,281	197,275	111,236	60,284	101,360	94,442	67,627
計	253,053	424,137	403,939	372,971	333,028	522,072	470,030

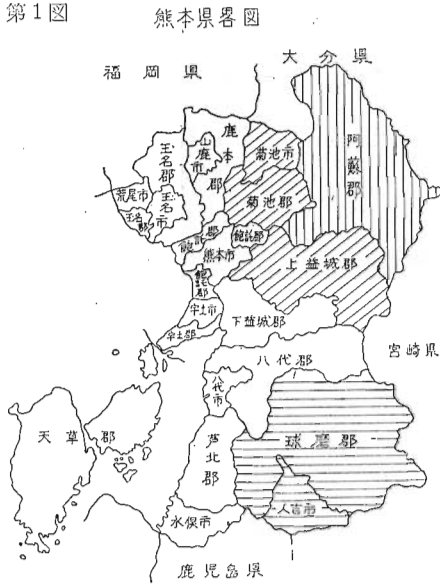
種別	32	33	34	35	36	37	基本計画目標
	千円						
シイタケ	365,721	394,384	327,240	452,276	529,886	418,515	760,000
クマタケ	17,681	18,390	27,480	38,040	40,290	56,056	76,560
竹タケ	110,865	110,750	188,460	216,352	134,105	193,410	100,000
タケノコ	45,000	45,000	45,000	37,500	87,570	147,000	40,000
その他	55,196	53,022	56,047	44,120	16,342	24,154	76,066
計	594,463	621,546	644,227	788,288	808,193	839,135	1,052,626

註 その他はツバキ・ハゼ・シュロ・コウゾ・マツタケ・ワサビ等である。

熊本県の椎茸生産も、地域的には山間地帯を中心とする阿蘇地方(37%)と人吉、球磨地方(30%)および上益城(12%)、菊池地方(10%)で県内生産量の約9割を占め主産地を形成している。このように椎茸

の主産地が奥地山間部に位置するのは、すでに大分や宮崎の場合の報告でも指摘したように、山間部の方が立地条件とくに原木条件および環境条件とくに気象条件に恵まれているからであり、熊本県でもこのような

第1図



一般的な傾向にあるものと判断される。

II 椎茸生産および流通における2、3の特徴

かかる熊本県の椎茸生産(流通過程をも含めて)が、他の主要生産県と比較していかなる特徴をもっているであろうか。

1) 生産品の特徴

熊本県における椎茸生産は、その主体が香信系におかれていることである。すなわち、全国的には、香信と冬茹の生産割合は6：4と云われているが、熊本県の場合は8：2と香信系が圧倒的に多く生産されている。熊本県内各生産地によって多少の異なりはあっても、全般的には中肉のものが多く、特に人吉、球磨地方では“ウスハ”のセロものがかなり収穫されるためその主体が香信系におかれている。

2) 生産形態における特徴

熊本県での場合、大規模の専業生産者の数は比較的少なく、**大多数は兼業生産者、すなわち小規模**の生産者であると判断される。換言すれば農業の片手間のごく小規模の生産者が大多数を占めている。

4. 熊本県下における椎茸生産の現状 (II)

— 専業兼業別椎茸生産者の実態 —

九州大学 青木 尊重・坂本 格・○吉良今朝芳

はじめに

熊本県下の椎茸生産者を対象に地区別に35人を無

このことは後述の流通過程で、重要な役割を果す熊本県椎茸農業協同組合の組合員数が僅かに300名余りで、椎茸販売農家の約3割弱であることをみても明らかである。

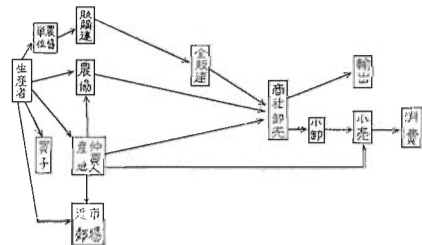
しかしこゝで数少ない専業生産者のなかで異色的な「人吉国有林椎茸農業協同組合」の存在についてみると人吉市矢岳、大畑地区11戸の椎茸専業生産者は椎茸原木をすべて国有林内(人吉営林署管内)にもとめているが、近年次第にその原木は減少し、さらに国有林の経営方針の変更に伴ない椎茸原木林をはじめとする広葉樹林の林種転換が行われるようになったので、昭和33年に本組合が——国有林内にある椎茸原木林の存置と保続育成を第一目的として——設立された。

この組合は、目的達成のため数回に亘り関係諸機関に陳情を繰り返えし、その成果の一つとして人吉国有林部分林組合を作り、国有林内に部分林を設定した。熊本営林局 球磨経営計画区 第2次 経営計画書によると、部分林設定見込区域、面積は大畑23.43ha、矢岳77.06ha、合計100.49haであり、すでにそのうち36年14.13ha、37年19.37haを設定しており、原木林の育成を積極的に実行していることは注目される現象である。

3) 椎茸の流通関係からみた特徴

流通過程における出荷径路は第2図で明らかなよう

第2図 流通経路



に、生産者団体としての熊本県椎茸農業協同組合、熊本県販売購買農業協同組合の農協系と商人系とに大別されるが、その取扱数量は農協ルートが3～4割で商人ルートが6～7割程度と言われている。この現象は、大分県や宮崎県の場合とは多少異っている。なかでも県内生産者の方が“現状”をこのまじい姿であるとして好感している点が特に注目される。すなわち普遍的傾向である集荷の一元化に対してそれ程の関心を示さず、むしろ現在のような農協系と商人系との存在に魅力を感じている生産者が比較的多いことは特に注目される。

作意に抽出し、アンケート調査を行った。本報告では解答報告数19件の資料並びに実態調査による資料をまとめた結果を述べることにする。